関西大学
東西学術研究所々報
第八十号

文学と写本における異文化受容の研究

異文化受容研究班

異文化受容研究班では、文学とそれが生み出された当時の社会背景の関係を明らかにしながら異文化受容の実態を考察する研究が行われた。「近代文学における異文化受容の研究」のセクションからは萩野脩二研究員と平田渡研究員、そして「写本の比較研究」の部門からは井上泰山研究員と和田葉子研究員が次のとおり、研究発表を行った。

（平成十七年一月十四日　研究例会報告）

発表要旨

井上泰山　研究員

「宋代話本と風流文学」

周知の如く、「話本」とは北宋の都で語られた物語りの台本に基づき、後に知識人が読み物としての体裁を整えた小説を指す。一方、「風流文学」は民代以降に専ら扇情を目的として書かれた艶情物を指している。その意味で、従来の文学史の常識から言えば、「話本」と「風流文学」とは直接的には結びつきにくい分野である。しかし、詳しく検証してみると、宋代の「話本」の作品の一部には、後の「風流文学」の芽ともいうべき描写がすでに存在していたことがわかる。従って、明代以降の「風流文学」のルーツを考えるにあたっては、単に明代の文学思想や社会的背景を分析するだけでなく、さらに時代をさかのぼって、元代や宋代の通俗文学にも目を向け、そこに現れている「風流文学」の要素を取り出し、詳細に分析しなければならない。今回の発表は今後「風流文学」研究を進めていく上での出発点とすべく、手始めとして、宋代「話本」の原型を伝えると考えられる『六十家小説』に収録された「死体を取り違える話」に重点を置き、そこに内在する艶情的要素に目を向けることによって、それが後の「風流文学」の発展とどのように関連していくか、という問題を考察した。